

著明な喚語困難を伴うウェルニッケ失語の一例

腰塚洋介¹⁾ 對馬ゆりえ¹⁾ 風晴俊之¹⁾ 杉下守弘³⁾ 美原盤²⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 リハビリテーション科

2) 同 神経内科

3) 公益財団法人脳血管研究所

失語症の喚語困難の研究は、単語の記憶メカニズムの解明に資するとして、従来から関心が持たれてきた。今回、著明な喚語困難を伴うウェルニッケ失語を呈した症例を経験したので報告する。症例は、62歳女性、右利き。頭痛、嘔吐のため他院に救急搬送された。失語、右同名半盲を呈しており、頭部CTで左後頭、頭頂、側頭葉の皮質下出血と診断された。24病日に当院に転院。25病日にWAB失語症検査を実施。重度の喚語困難と中等度のウェルニッケ失語を認めた。単語レベルの聴覚的理解は良好、自発話は流暢で発語失行はなかった。55病日、再度WAB失語症検査を実施。理解障害は軽度にまで改善したが、喚語困難は残存していた。その後、刺激等価性検査により呼称と単語レベルの聴覚的理解に関する追跡調査において、呼称は13/31、聴覚的理解は31/31正答であった。本症例の喚語困難は、意味記憶に関与していないと考えられた。